

随想

逝きし者を悼む

別れを惜しみ、死を受け入れる

加藤 宏光

突然の電話である。

十月二十日、第八回日本養鶏産業研究会の始まる前、ご出席下さる皆様に挨拶していた最中に国際電話が入った。

六年前に来日し、四年間の長きにわたって著者の研究所で重ねた研究を元として、大阪府立大学大学院で博士号を取って、アメリカ等からの誘いを断って帰国したラプツ・ランディ博士の携帯電話ナンバーが表示されている。彼は余程の緊急時でなければメールで連絡してくる。胸騒ぎのうち電話を受けると焦った女性の声が、判りにくい英語

で話しかけてくる。思い当たる人ではないので「誰ですか?」と尋ねた。

「ランディの妻です。彼が心臓発作で倒れました」との悲鳴のような声。

驚いて、「心臓発作?」と問い返す。

「そうです。彼に代わりましょうか?」「代わって下さい」

そして、彼が出た。しかし、「先生!!」といった後言葉が出ない。ただ、嗚咽の音が耳に入るのみである。

「心を強く持て。自分を信じて。何があった?」と聞いても、声がつれて何を言っ

ているのかよくわからない。そこで「そのまま、ちょっと待て。電話を切るな」と言って、現在彼の後を追って来日し、著者の下で鶏病を研究している留学生、デニス・ウマリに急いで携帯電話を渡した。緊急のときに、英語を聞き間違えることを恐れたからである。

緊急入院した彼は《大動脈弁の異常で、大至急弁を移植しなければならぬ》とのことであった。今のいま、研究会の開始に当たってどうすることもできない。翌々日には弁移植手術との情報を得て、

良い方向への展開を望むばかりであった。

しかし、心臓に決定的なダメージの出た彼には手術の障害となる二次的な重篤な症状、肺水腫、腎臓機能不全が次々に発現し、入院八日目にしてついに帰らぬ人となったのである。享年三四歳、まさに逝去の翌日に三五歳となるときであった。

彼が死ぬまで苦しい息の中で《著者に会いたいと言いつけていた》との話を聞いて、予定を組み替えて葬式に参加することにした。このとき、著者は彼の国における葬式の

形がわが国といかに異なるかを知り驚いた。

われわれ日本人にとっては通夜と葬式(告別式)が対になってる。さらに、忙しいこの頃では、初七日も組み合わされているケースも多い。

葬式に参列し、故人を悼んでも、帰路にはそれらは過ぎたことになっている。例え心に深く思いが残っていたにしろ。

しかし彼の国では、葬式は次のように行われる。

防腐処理を施された遺体は、五日から七日に渡って式場に安直され、その間家族、親族をはじめ近しい人々は何度でも故人に別れを告げにくる。

告別の最後の日に家族、親族や友人が集まり別れを惜しみながら土葬するのである。

彼が逝ったのが十月二十七日の午前二時、大急ぎで日本を発つても三十日の午前であり、日本の葬儀をイメージしていた著者は、「熱帯の国での葬儀は急ぐに違いない。葬

儀にはとても間に合うまい」と思い込んでいたが、この情報で十分な時間が与えられていることにホッとした。同時に、それ程の長い期間故人と接していて、家族たちは精神的に大丈夫なのか、とも気になり始めた。

三十日の午後早くマニラ空港に到着した著者らを彼の細君が迎えに来てくれた。これとて、わが国の週間からすれば考え難いことである(いかに外国から悔やみの客人が来たとはいえ、故人の細君が式場を離れ迎えに来ることがあるだろうか!)

二時間足らずの車の移動で、式場へ着いた。式場には家族、親族を中心として故人を悼むために集まった人々が座っている。それぞれが何事かを話しながら。中には顔なじみもいて会釈を交わす。

祭壇には、弔問者がすぐに会えるように、スーツ姿の彼は上半身を透明なケースに覆われ、腰から下は箱蓋で見え

ない状態で安置してある。眠っているような姿に胸が裂ける思いである。

彼の父親、母親、弟や妹と挨拶を交わすものの、このような場合にどのように気持ちを表せば良いのかわからない。

一時間ほど後にミサが執り行われるとの話で、それに参加することにした。

待っている間、集まっている人々の様子を見るに、家族、親族が、ときどき何か飲食しながら話し合っている。一見葬式らしからぬ日常的な様子である。わが国の葬式なら、いかにもそれらしい荘厳あるいは沈痛な空気に包まれている。

しばらくして、ミサが始まった。現地語で何を語りかけているのかわからないが、司祭たちの様子、集まっている人達の様子は、厳肅な雰囲気に変わっている。式は三〇分あまりで終わり、家族と共に食事を摂った。食事の最中では故人の思い出話を中心である

のは、ここでも同じ。翌日には、マニラへ移動であるが、急ぐこともないので、午前中に再度式場を訪れ、最後の別れを告げた。

ここで、はたと気付いた。五〇七日の長きにわたる別れを告げる家族や親族は、葬式の中に日常を折り込まざるを得ない。

そのようにして過ごすうちに、それぞれが親しい故人の死を徐々に受け入れるのであろう。そして、十分な別れの時間をとった後に彼を天国へ送り出す。

忙しさの中にわれわれは何かしら大事なものをどこかに置き忘れていたのではないかと、大事な人を失ったという特別なときにすら、便宜上の都合を優先にしているわれわれが精神的にどこかを病んでいるのではないかとすら思われせられる大きな経験をした。